

図書紹介

平間源之助著、平間洋一編 海自57

「軍艦「鳥海」航海記

平間兵曹長の日記

昭和16・17年

大東 信祐 陸自57

帝国海軍の重巡洋艦「鳥海」(一万トン級・20センチ砲装備)は、大東亜戦争の緒戦中期にかけて仏印マレー正面の旗艦として活躍し、引き続きインド洋作戦、ソロモン群島の諸作戦に従事している。

筆者の平間兵曹長(後大尉)は通信の諸課程を修了し、練習艦隊の勤務の後、兵学校等の勤務を経て昭和16年重巡艦「鳥海」の掌航海長として勤務した後、「対潜」の特修課程の教育を受け、横須賀防備隊において駆潜艇の艇長等の勤務を経て、終戦を迎える。

終戦後は海上保安庁の勤務を経て民間会社に勤務し、昭和30年に逝去された。その後、御遺品の中に昭和16・17年「鳥海」乗り組み当時の日記が見出され、「子息「洋一」氏(元防大教授・海将補)がこれを整理し出版に至ったものである。

「鳥海」は艦隊の旗艦としての配置が長く、華々しい戦闘の場面は少なく、いわゆる戦闘記録ではないが、

艦艇乗り組みの一員としての個人の記録で、当時の乗組員の日常生活、訓練の状況が細かく記録されている。また、ハワイ作戦、マレー沖海戦、スラバヤ沖海戦、バタビア沖海戦、インド洋作戦等の状況が現場にどの様に伝えられたか等を興味をもって読むことができる。それぞれの状況

については、編者により適切な脚注が施されており、理解が容易である。後半ソロモン諸島の戦闘の推移に伴い兵力・物資の推進に苦勞している状況、潜水艦の脅威が増大するにつれて対潜警戒に苦勞し、ラバウル湾に位置する艦艇も航空勢力の推移に伴い、飛行艇による偵察から逐次B17による偵察、更に爆撃を受けるに及んでカビエンに退避する等、在泊艦艇の動きも変化する状況が活写されている。

また、個人の日記であり、艦内生活の状況や故郷を想い、妻子に対する愛情も随所に表され、家郷からの音信を待ちわびる心境、酒保品の配分に癒される状況等はほほえましく感じられ、当時の艦艇乗組員の戦時下の生活状態を知ることができる。

イカロス出版刊

新宿区市谷本村町2-13

電話03-3267-2868

価格1750+税

図書紹介

河井繁樹著 陸自83

「元陸上自衛隊陸将補が

書いたリアリズム国防論

喜田 邦彦 陸自66

著者の河井氏は、昨年「偕行」12月号「浦安市が推進する自助・共助の推進施策」寄稿者である。退職して3年、危機管理監として市内の自治会を回り、啓蒙活動を続けておられる。

今回の著作は、出版社の薦めによるもので、それを機に執筆・編集・出版に漕ぎつけた。対象者は一般国民で、狙いは「自衛隊への理解を深める」と。それによって少しでも募集環境が改善されれば」と考えたそう。

従って、国防の素人にも読みやすい、見やすい工夫がなされている。例えば、国防・自衛隊に関する専門用語(憲法9条、専守防衛、防衛大綱、陸上総隊、中国の防衛戦略等々)は、メモ欄に要約して進めるので、偕行の読者ならば飛ばして進めるだろう。

次に、「陸将補が書いた」と表紙に掲げているが、著者の自衛官キャリアはその時代の先端を歩んできたようだ。任官直後の「冷戦時代」は、

対ソ国境に近い名寄の第3普通科連隊で小隊長。佐官になり、久居の第33普通科連隊で中隊長として隊員を鍛え、交戦訓練装置が導入されれば

評価隊長を務め、大村の第16普通科連隊長時代は災害派遣や島嶼防衛の訓練で部隊を鍛え、中央即応集団の幕僚長では、「ゴラン・ハイチ・南スーダン」等の海外派遣に関わった。最後は、海田市へ第13旅団の副旅団長として広島県の土石流災害への対応に加わっている。

だから、著者の視点は部隊や隊員とともに、国民や現地の人達に向けられたものが多く、そこでの苦勞・工夫・所見をさらりと述べている。したがって、人間くさく、専門職が持つ押しつけがましさは感じられない。「33年間も続けてこられたのは、自衛隊という組織、人を育てるシステムがしっかりとっていたから」だと謙虚である。

ここ数年、少子化の影響を受けて高校生等の募集は目標を切っている。著者は「あとがき」で、「自衛隊が平時何をしているか?」「自衛隊の存在に何を期待するか?」を一般の国民に理解していただき考えていただきたいと、訴えているのが印象的だ。

国防のあるべき論でなく、かといって国民に迎合する態度でもなく、国防の専門家と一般国民との認識のギャップを埋めるようとする熱意がうかがえる。陸自の標語は「守りた人がいる」だが、それはどういうことかを知りうる良書である。

発行所 彩図社

03-5985-8213

定価 本体1200円(税別)